

P 会員

津坂 治男

つきか はるお 詩人。1931年6月15日、三重県生れ。1977年詩集『石の歌』により第10回小熊秀雄賞受賞。主な詩集『大きくなったら』、『天命』など。掲載作は、『石の歌』（1976年8月三重詩話会刊）より、抜粋。

詩集『石の歌』より

目次

うた

皮

食う

一足 ふんぼる

うた

あなたが上にいるから
私は横にのび出る
あなたが枝をうつから
私は芽をそろえる

あなた一人のものから
光をとりもどすため……

あなたが芽を摘みとるなら
私は枝をひろげる
あなたが幹を断ちきるなら
私は根をひろげる

あなた一人のものから
空をとりかえすため……

あなたは私を圧えようとする
私はあなたを逃げようとする
あなたは私を絶やそうとする
私はあなたを囲もうとする

あなた一人のものから
世界を呼びもどすため……

あなたが私のまわりに塀をたてれば
私は塀のまわりから無数の芽をふく
あなたが私の頭におおいをかければ
私はおおいの上から葉をしげらせる

あなた一人のものではない
光と空とを楽しむために

皮

これは何？ 大きな白に
すりつぶされて ベたり
コンクリートを抱く
灰色の皮——血のいつてきも
肉のひとかけらも奪われた
皮

これは誰？ たえまなく
押しよせてはすぎるトラックの
タイヤの下で しずかに
乾いていく^{いのち}生命——
そばに行く一人も
ふりかえらない

それはおれ！ あすの午後五時
つまずき 倒れたまま
記憶も愛も 脊髄とともに
車道を磨くだけ……
コートも靴も 詩も
ほこりとなるまで

それはおれ！
うったえようにも目はなく
言い残そうにも口なく
拾いあげる手はおろか
聞いてくれる耳などなく
おしつぶされた骨からむしりとられて
しみのように あちこち
散らばり すりへっていく
皮

食う

こつこつこつ
食う
とりたちが
ひたすらに食う
ほこりでにぶい
電燈に照らされ

四階建ての
マンションのドアから
頭をつき出し
みぞの底から
餌をついばむ

こつこつこつ
ごつごつごつごつ

屋根を打ちはじめた
しぐれの
ただけしきをはね返して
五百羽の
とらわれ鳥たちが
食う 食いあさる
くらやみの中の
鬼火のもとで……

一足 ふんばる

1

一足 ふんばる
一足 進む
厚い唇締め
丸い目ひらき

五メートル十秒
腹をつき出し
肉のおとろえと
格闘しつつ……

M. きょうも歩く
手すりにつかまり
教師の腕に寄り
あるいは ひとりで

決して負けぬとM.
肩をいからせ……

2

すりへった草履

ななめにつっかけ
車椅子拒否する
M. 13才

病名 進行性
筋萎縮症——
廿才^{はたち}までに ほぼ
生涯を閉ず

一足 ふんばる
一足 進む
生命^{いのち}をこの歩みで
確かめるため

弱音吐かぬとM.
笑みまで浮かべ……

3

西風が吹けば
膝が震える
と うったえるM.
一月八日

車椅子で来た
ただ黙々と
春が来るまでだと
言い聞かせてか——

乗れば もう再び
歩けはしないと
いつか言ったことばを
思い出してか——

ひたすら椅子こぐM.
寒風の中……

4

帰省を終える朝
痰をつまらせ
死んだ仲間がいる
14才で

暮れにもなくなった
15、中三……
誰も語ろうとせぬ
ただ黙々と

あるいは笑み浮かべて
車椅子こぐ
せばまる明日に向けて
ひたすら生きる

ここ 鈴鹿 筋ジス
四十数名

Tsusaka Haruo

日本ペンクラブ 電子文藝館編集室

This page was created on Jul 28, 2008